

高齢患者だけでなく、若年者においても肺炎による心不全リスクは高い

高齢の市中肺炎患者は心不全のリスクが高いことは知られているが、他の年齢層や肺炎の重症度との関連については不明である。本研究では、市中肺炎による心不全の発症に対する寄与リスクを、患者の年齢別および肺炎の重症度別に評価するため、前向きコホート試験を実施した。

2000～2002年にカナダ・エドモントン市内の6つの病院または7つの救急病院で市中肺炎と診断された、心不全の既往のない成人患者4,988例が登録された。患者1例につき、年齢・性別・治療状況（入院か外来か）を適合させた、肺炎に罹患していない者を最大5例、対照群に設定した（23,060例）。追跡期間の中央値は9.9年であった。結果、心不全の発症率は、肺炎群で11.9%（592例）、対照群で7.4%（1,712例）と肺炎群で有意に高かった（補正ハザード比1.61）。65歳以下では、肺炎群と対照群の心不全発症率の絶対差は小さかった（4.8%対2.2%）が、相対リスクは高かった（ハザード比：1.98）のに対し、65歳以上では両群の絶対差は大きかった（24.8%対18.9%）が相対リスクは低かった（ハザード比：1.55）。この傾向は90日以内の心不全による入院および1年以内の心不全の入院でも、また、入院および外来患者ともに認められた。

したがって、高齢患者だけでなく、むしろ若年の市中肺炎患者で心不全リスクが高いことが示された。この知見は、退院後の治療計画や予防戦略の立案や呼吸困難について評価する際に考慮に入れるべきである。

出典：British Medical Journal(Clinical research ed.). 2017 Feb 13; 356: j413